

マルチメディア教育機器としてのDVDビデオ

—語学教育と映画教育をめぐって—

杉野健太郎・清水 明

DVDはLDやCDなどとともに光ディスクの一種であり、その呼称はDigital Video Discの略である。1995年12月にソニー、東芝、フィリップスなどの大手メーカーを中心にDVDビデオの規格が統一された。デビューは1996年10月であり、エレクトロニクス・ショーで8社がDVDプレーヤーを出品し(原田2)、直後に市場でも売り出された。DVDと言えば、まだDVD-VIDEOを指すのが普通である。だが、今では、DVD-ROM、DVD-RAM、DVD-R、DVD-RWなどがあり、そのような使用用途の拡大にともない、最近では、DVDはDigital Versatile Disc(デジタル多用途ディスク)の略とみなされるようになった。本論文で扱うのは、DVD-VIDEOである。このDVD-VIDEOは、再生のみだが、DVDを用いたポストVHSの次世代録画機の開発競争が現在では激化していることは、『朝日新聞』1999年10月6日付の記事「ポストVHSの座狙え 次世代録画機、規格争い激化」が報道する通りである。そして、そうこう言っているうちに、早くも1999年12月にパイオニアから世界初のDVDレコーダーDVR-1000が(それも25万円という価格で)発売された。

DVD-VIDEOと同じく光ディスクを利用した映像・音声再生装置といえば、1981年に実用化されたLD(Laser Disc)がすぐに思い浮かぶ。DVDとLDとの最大の違いは、記録容量である。LDソフトは最大で2時間が限度だが、DVDの場合は2時間から16時間を収録できる。これは、1992年秋のハリウッド映画業界の日本メーカーへの依頼をきっかけにDVD-VIDEOが開発されたという経緯からも当然と言えば当然である。ちなみに、ハリウッドは全映画の95パーセントが収まる135分という条件を出したという(この諸条件の詳細に関しては、長谷川34を参照のこと)。また、LDは画像・音声信号をアナログ・データとして記録・再生するが、DVDはデジタル・データとして記録・再生する、などの違いがある(DVDの細かい技術的な側面に関しては原田や長谷川を参照のこと)。DVDとLD両者(さらにはVTR)の細かい機能の違いは下記の教育への応用を論じた部分に譲るが、予め述べておくと、LDがDVDに勝る点は殆どない。現在の時点でLDがDVDに勝るのはソフトの数くらいであるが、これもそう遠くないうちに解消されるだろう。

さて、DVDがどの程度普及しているか見てみよう。以下は、杉野が平成11年度前期の自分の担当クラス全部(専門科目3科目と共通教育科目1科目)の学生120名(うち約40名は一年生)を対象として試みに実施したアンケートの結果である。

	【自宅で利用できる】	【大学で利用できる】
カセットテープ	88% (106名)	53% (63名)
CD	99% (119名)	39% (47名)
MD	39% (47名)	18% (18名)

ビデオ	88% (106名)	61% (73名)
LD	4% (5名)	33% (39名)
DVD	2% (2名)	18% (22名)
ワープロ専用機	26% (31名)	18% (22名)
コンピュータ	33% (40名)	69% (83名)

LDとともにDVDビデオの普及率は低い。大学で利用できる率も、LD33%、DVD18%となっているが、これは清水と杉野が教官をつとめる人文学部文化コミュニケーション学科英米文学分野の学生がアンケート対象の5分の1ほどを占めるからということもあるだろう。一般的にはもっと低いことが予想される。実際、信大の共通教育センターには、今のところLD、DVD機器ともに一台もない。後に述べる教育への有効性を鑑みれば、これは由々しきことであろう。

信大での普及率は以上のような程度であるが、1996年秋に発売されたDVDの普及にとって足かせとなっていたソフトの少なさが解消され始め、1997年に世界で100万台程度だったものが1998年度には250万台程度となり一気に普及の兆しを見せている（「デジタル家電最前線④ DVDの可能性」『朝日新聞』1999年5月13日付、「DVD普及倍増ペース」『信濃毎日新聞』1999年12月22日付）。ソフトに関して述べれば、VTR・LDソフトに関しては『ビデオソフト総カタログ』（音楽出版社）などが刊行されているが、DVDに関してはインターネットのホームページ「GO!GO!!DVD!!!」（<http://www.dvd.ne.jp/default.asp>）が最も充実しており、検索もできる。それによると、1999年12月17日現在のDVDビデオのソフト数は4046タイトルであり、急激に増えている。ちなみにDVDソフトの価格は、セルビデオよりわずかに高い4,000円前後という購入しやすい価格である。

さて、このように急速に普及しつつあり低コストで導入できるマルチメディア視聴覚機器であるDVDビデオがどの分野の教育に応用できるか少し述べてみよう。DVDソフトは、音楽、美術、ドキュメンタリーなどのジャンルのソフトも発売されている（詳細は、上記インターネットホームページ「GO!GO!!DVD!!!」などを参照のこと）が、やはり映画が主である。この映画ソフトが応用できる教育／研究分野を考えると、語学教育／研究、ならびに、映画教育／研究である。

しかし、発売されて3年以上が経っているにもかかわらず、DVDの教育利用に関して書かれたものは極めて少ない。例えば、語学教育に関して言えば、1998年12月に刊行された『英語科教育の基礎と実践—新しい時代の英語教員をめざして』では「教育機器の活用」という章があり視聴覚機器とマルチメディアが論じられているが、VTRとクローズド・キャプション・デコーダーに関する記述はあるものの、LDについては数行だけであり、DVDに至ってはまったくない。1999年3月に刊行された「視聴覚機器—テープ・CD・ビデオ教材、ラジオ・テレビ番組などの利用法」と1993年7月に刊行された『英語教師の四十八手3 AV機器の利用』には、LDに関する適切な記述はあるがDVDに関する記述はない。出版年から考えて当然だが、1995年刊行の『映画英語教育のすすめ』にもDVDに関する記述はない。また、語学分野以外へのDVDの応用に関しては、初版が1992年に刊行された『大学力を創る：FDハンドブック』その他にはわずかな言及があるのみであり、1997年に

刊行された『ケースブック 大学授業の技法』や『ガイドブック 大学授業の改善』にはLDとともにDVDも言及すらされていない。だが、1999年に刊行された『新訂 視聴覚を刺激するメディア活用』には適切な記述がある。しかし、この本よりも新しい瀧口論文「映画・ビデオの利用」がDVDに言及もしていないのは不思議である。いずれにせよ、DVDビデオの語学教育への具体的な応用に関してはまったく論じられていない。映画教育への活用に至っては、日本で映画研究がまだ定着していないためか、話題にのぼることさえない。

このように教育への応用が論じられることが少ないDVDビデオではあるが、本論文では、DVDビデオが最も有効な教育分野であると思われる語学教育ならびに映画教育における有効性とその具体的活用法を論じる。

I. 語学教育におけるDVDビデオの有効性

視聴覚メディア一般の有用性に関する心理学的考察は井上編『視聴覚メディアと教育方法—認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために』にまかせておいて、『現代英語教育』1999年1月号に掲載された「資料 大学生の英語学習に関する意識調査」における「具体的にどのような英語学習をしていますか」という問いに関する回答（複数回答可）を見てみよう。

英語教材 (テキスト)を使 って	映画のビ デオを使 って	英会話ス クールに 通って	英語教材 (カセッ ト・CD・ ビデオ)	ラジオ英 語放送	英字新 聞・雑誌 などで	テレビ英 語放送	外国人の 友人から	英語の日 記・文通 を通して	通信教育 で	大学内外 のサーク ルに所属	インター ネットを 使って	その他
33.3	24.7	21.0	18.3	18.3	17.2	15.1	14.5	13.4	8.1	7.0	6.5	9.1

数字の単位は%

「映画のビデオを使って」が24.7%と「英会話スクールに通って」の21.0%を上回り二位にランクされているのが目につく。もちろん、このデータだけでは決定的なことは言えないが、「映画のビデオを使って」の英語学習が二位にランクされている理由は、コストや利用の容易さ以上に、好きな映画を字幕なしで楽しみたいといった映画に対する強い動機付けが原因であろう。語学教育の専門用語を用いて言い換えれば、その動機付けには、オーセンティシティが関わっているであろう。すなわち、日本人向けに作られた英語ではなく、実際にネイティブ・スピーカーが観ている映画やテレビ番組を観たり聞いたりして理解できるようになりたいという動機から、「映画のビデオを使って」という回答が二位になっているのだと思われる。この映画ビデオを使った英語学習の場合、涵養できる能力あるいは技能は、4技能（Listening, Speaking, Reading, Writing）あるいは6能力（4技能+文法力、語彙力）のうち、主にListening力であると言えるだろう。いずれにせよ、このアンケート結果は、ビデオ映画のエデュタテインメント（Education+Entertainment）としての可能性を感じさせてくれる。もちろん、ビデオ（正確に書けばVTR）よりもDVDビデオの方がずっと語学学習に役立ちますよ、ということの説明するのが本論文の目的の一つである。

さて、その目的を果たそう。次に、DVDの機能を解説し、同じく映像・音声再生機器で

ある（文字も表示するので、さらにはマルチメディア機器とも呼びうる）VTR（Video Tape Recorder）とLD（Laser Disc）などと比較しながら、DVDの語学教育における有効性を立証したいと思う。

1. DVDの機能と語学学習／教育

◇音声

映画を用いた語学学習の場合は、目標言語（対象言語）の音声記録されていなければ話にならない。目標言語とは、英語学習の場合は英語のことである。英語がオリジナル音声の映画ソフトを例にとって説明しよう。VTRビデオソフトの場合は、ステレオ音声なので技術的には二音声まで記録可能である。しかし、実際には二音声記録されているソフトはまれであり、英語がオリジナル音声の映画の場合は英語（オリジナル）だけが記録されている場合が多い。LDソフトもVTRビデオソフトと同じである。これに対して、DVDは、理論的には8音声まで記録可能である（『DVDバイブル』12、長谷川21）。しかし、実際は、オリジナル音声のみ記録というものが多い、と言えるだろう。（すべてのソフトを検証できた訳ではない。多くは前述したDVDソフトのホームページで検証できる。またDVDのパッケージにも表記がある。）しかし、テレビの吹き替えと同じく、二音声（英語と日本語）というものもかなりの数にのぼる。おそらくこのような二音声ソフトは視覚障害者のために開発されたものだと考えられるが、同じ台詞をオリジナルと日本語の音声で聞くことができるので、語学教育（オリジナル言語の教育と日本語教育）にも有効である。また、ジャッキー・チェン主演の『ポリス・ストーリー 香港国際警察』（パイオニアLDC、4,700円）の場合のように、広東語と北京語の二音声という少し珍しいソフトもある。このソフトでは、同じ台詞を広東語と北京語で聞くことができるので、両方言の教育に活用できるだろう。ただ、問題点は、二音声記録されているソフトはオリジナルの英語と日本語の二音声というケースがほとんどであり、オリジナルが英語以外のものは、極めて少ないことである。今後、英語以外をオリジナル音声とする二音声ソフトの増加が望まれる。

◇字幕

VTRソフトの字幕は通常一種類だが、CC（クローズド・キャプション）と呼ばれる機器（デコーダー）とソフトを用いれば、二言語の字幕表示が可能である。具体的に書けば、英語がオリジナル音声の映画の場合は、通常は日本語字幕で、その上に英語の字幕が表示できるというソフトが日本では多い（CCは、聴覚障害者のために最初は開発された[関谷163-164]）。難点は、クローズド・キャプションのためのデコーダー（あるいはデコーダー付きのテレビ）が必要なことと、ソフトの数の少なさ（60くらい[関谷165]）であろう。LDの場合も、VTRと同じ二言語の字幕表示が可能で、VTRと同じCCあるいはグラフィックスで字幕を表示する（小西168-169）。難点は、LD-G（Laser Disc Graphics）機能付きのLDプレーヤーが必要なことと、170くらい（小西169）とソフトの数が多くないことである。

これに対して、DVDの場合は、理論的には、32言語の字幕（スーパー・インポーズ）が記録でき（『DVDバイブル』12、長谷川22）、これが実現できるのはDVDの大記録容量ゆえである。また、字幕の種類の数以外に、以下の二点がDVD字幕の長所である。1)字幕

が消せる。2)字幕がきれいに表示される。1)に関して言えば、VTRとLDでは不可能であり、外国語映画の場合はどちらか(外国語か日本語)の字幕が表示されたままである。2)に関して言えば、CCビデオとLDでは、二つ目の言語(たいていは外国語)の字幕は最初の言語の字幕に重なるようにして表示されるので、最初の言語の字幕が見えることもあるし、映像を損なっている。ただし、このDVDビデオの機能を用いても同時に二言語(例えば日本語と英語)字幕は表示できない。おそらく技術的には可能だと思われるので、今後ソフトの改良が期待される。

さて、このDVD字幕機能を用いた具体的な英語学習あるいは教育方法を挙げれば、まず字幕なしで、そして次に英語字幕で、最後に日本語字幕で見る、といった方法が挙げられるだろう。また、字幕なし、あるいは英語字幕で、ロール・プレイを行うことも有効な学習あるいは教育方法であろう。ちなみに、アメリカでは、この字幕機能を英語の読み書き(WritingとReading)教育のために使っている(関谷 164)。母語(アメリカ人の場合は英語)の場合の言語能力の発達は、Listening, Speaking, Reading, Writingの順に発達するが、Listening, Speakingは自然に習得できるのに対し、Reading, Writingには学習が必要なためである。

しかし、実際には、外国語映画、特に古い映画のなかには日本語字幕しかないものも多くあるので、音声のところでも述べたのと同じ方法で確認が必要である。ソフトの字幕に関する例をあげると、ロビン・ウィリアムズ主演の『いまを生きる』には、三種類の字幕(日本語、英語、日本語吹き替え版用)が入っている(ちなみに音声は、英語と日本語の二種類)。おそらく、日本で現在発行されているソフトで字幕の数が最も多いのは、音声のところでもあげた『ポリス・ストーリー 香港国際警察』であろう。8言語(中国古語、中国簡体、英語、日本語、韓国語、マレー語、インドネシア語、タイ語)の字幕が表示できる。二種類の音声との組み合わせは、16通りである。また、最近の日本語オリジナルのソフトにも、聴覚障害者への配慮、輸出への配慮、などのためか、日本語と英語の二種類の字幕が表示できるものが増えている(例えば、『打ち上げ花火、下から見るか?横から見るか?』『がんばっていきまっしょい』など)。もちろん、音声に日本語がある場合と同じく、このようなソフトは日本語教育に用いることができよう。さらには、日本語の台詞の英語字幕を表示することによって、英作文などの外国語教育にも有効である。

◇リピート再生

リピート機能に関しては、VTRと光ディスク系のLD・DVDとの間には大きな違いがある。VTRを用いてある部分をリピートするには、時計表示を見ながら巻き戻してから再び再生するしかない。

これに対して、LDとDVDは、A-B二点間リピート、チャプター・リピート(あるいはタイトル・リピート、トラック・リピート)が可能である。このA-B二点間リピート機能の語学教育/学習に対する画期的有効性は説明するまでもないと思う。何回も何回も正確に指定した二点間をリピート再生してくれる。その上、そのリピートの中に、音声と字幕の切り替え、そして変速再生(下記参照)も可能である。チャプター・リピート、タイトル・リピート、トラック・リピートというのは、出荷時に記録されている区切りの部分を再生し

てくれるものである。映画ソフトの場合は、チャプターに分かれているソフトが大半である（ということは、分かれていないソフトもあるので注意が必要である、ということである）。このチャプターを何回も正確にリピートできるわけである。映画の場合は、1チャプター5分前後がふつうである。例えば、前述した『いまを生きる』の場合は、128分が23チャプターに分かれている。

◇サーチ機能と変速再生

該当箇所をサーチすることは、授業あるいは自主学習を円滑に行うために有効である。VTRの場合は、アナログゆえにランダム・アクセスが不可能である。時計表示を頼って早送り・巻き戻しするしかない。ただし、昔と違って今は、画像を観ながらサーチできるようになっている。

これに対して、LD・DVDの場合は、ランダム・アクセスが行える。DVDの場合は、メニューにチャプター一覧が表示される（されないソフトもわずかながらある）ので、それに従って該当箇所の近辺をサーチできる。LDの場合は、メニュー表示機能がなく、チャプター一覧を見て該当箇所をサーチすることはできない。LDの場合は、チャプター一覧に関しては、パッケージあるいは付属の解説パンフレットを参照しなければならない。また、DVDの場合はほとんどのソフトがチャプター分けされているのに対して、LDの場合はチャプター分けされているものは少ない。

変速再生機能もサーチに利用できる。VTRの場合は、早送り再生、巻き戻し再生、スロー再生などができるが、画面が乱れる。LDならびにDVDの場合は、正方向ならびに逆方向それぞれ8通り程度（機種によって異なる）のスピードで再生でき、画面も乱れない。ただ、DVDに比べると、LD再生装置の場合は、片面に記録できる容量が少ないために、サーチに時間がかかる。

ところで、変速再生時の音声に関して述べると、VTR、LD、DVDの三機器とも、変速再生時に音声再生はできない。例外的に唯一変速再生時に音声再生ができるのは、サンヨーの時短プレイ機能付きVTR機器だけである。ちなみに、この機能は、音声をデジタル処理することによって実現した。この機能は初期のものとは比べるとかなり進化しており、最新の時短プレイ（話速変換タイプ）では早口にならない自然な音声を実現されており、語学学習にも用いることができるほどである。

◇一時停止

VTRの場合は、画面が少し乱れる。LDとDVDの場合は、きれいなスタイル（静止画）の状態での一時停止でき、字幕を読むのにもまったく支障がない。完璧である。

2. スクリプトの問題

さて、以上のように、DVDの機能は、VTRさらにはLDに圧倒的に勝るものであり、語学学習に欠かせないものである。そもそも、原語字幕表示のあるソフトには、スクリプト（シナリオ、脚本）は必ずしも必要でないと言えるかもしれないが、次に、スクリプトについてふれよう。

スクリプトは、映画によっては出版されていないか入手困難なものもあるが、出版されているものを大まかに分けると以下の二種類に分けられるだろう。

- 1) 主に外国の出版社から出版されたもの
- 2) 日本の出版社から語学教育向けに注や日本語訳をつけて出版されたもの

(日本の出版社から語学教材用として出版されているもののカタログとしては、『英語をモノにするためのカタログ '99』の「映画で英語をモノにするための教材」を参照のこと)

外国の出版社のものは当然ながら原語しか載っていないのに対して、日本の出版社のものは様々な語学学習向けの工夫が加えられている。スクリプトを用いる場合は、外国出版社のものか日本の出版社のものか、どちらを使うかは学習者のレベルなどに応じて決めればよいだろう。

また、言うまでもないことかもしれないが、スクリプトにせよ字幕表示にせよ、実際に話されている台詞とは微妙に異なる(調査したわけではないが、原語字幕は、かなり正確だという印象を持っている)ので注意を要する。もちろん、字幕と実際に話された台詞との差異を見つけるといった課題を学生に指示して、教育に役立てるといったこともできるだろう。また、インターネット上でスクリプトが公開されている場合もある。例えば、映画やテレビドラマなどの台本が600本以上公開されている「Drew's Script-O-Rama」(<http://www.script-o-rama.com/>)を参照のこと。

スクリプトの具体例をあげれば、ドイツのヴィム・ヴェンダース監督(脚本はアメリカの劇作家サム・シェパード)の『パリ、テキサス』は、日本の出版社(南雲堂)から対訳つきの本が出版されており、また、この作品はニューヨークのThe Ecco Pressからスクリプトが刊行されている。また、DVDソフト(カルチュア・パブリッシャーズ)も発売されているので、英語学習/教育に用いるのに適当かと思える。ただ、DVDソフトの字幕は、日本語字幕のみであり、表示のオン・オフも不可である。

3. DVDソフトとCD-ROMソフトとの比較

さて、最後に、コンピュータを用いた映像つきCD-ROM英語学習ソフトについてふれよう。例えば、映画ではなくテレビ番組だが『英語上達 ビバリーヒルズ高校白書』『英語上達 スタートレック』のシリーズ(ソース、各6,800円)、バーチャル・シアターシリーズ(サクセス、各8,800円)、『映画で英会話』シリーズ(朝日出版社、各2,500円)がある。カタログとしては、『英語をモノにするためのカタログ '99』の「パソコンで英語をモノにするための教材」を参照のこと(ただし、最後の朝日出版社のものはまだ掲載されていない)。以下、DVDと比較しながら、各シリーズを検討してみよう。

◇『英語上達 ビバリーヒルズ高校白書』『英語上達 スタートレック』シリーズ

(ソース、各6,800円)、1998年発売開始。音声部分のテープ付き。

このシリーズの最大の欠点は、動画ではなくコマ送り(スタイルの連続)である点である。したがって、映画あるいはTV番組ソフトとはみなしにくく、これらの人気TV番組をそのまま観られると考えた学習者は少しがっかりするであろう。また、そのスタイルにしても、

TV 番組全体から取られているのではなく、一部である。

しかし、やはり語学学習専用のソフトだけあって、DVD や LD ソフトにはない機能を持っている。ソフトの台詞表示は DVD や LD でも利用できる機能だが、以下の機能は DVD や LD では実現できない。会話リピート機能（ある会話を一つの単位としてリピートする。ただし、このソフトでは A-B リピートのような細かい指定はできない）／会話スピードの調節／発音レッスン（単語の発音の口の形を示してくれる）／発音聞き比べ機能（自分の発音を録音してネイティブの発音と聞き比べられる）／単語検索（ドラマの中で同じ単語が使われている箇所を検索）／単語帳作成機能（マスターしたい単語をリストにできる）。

◇バーチャル・シアターシリーズ（サクセス、各8,800円）、1997年発売開始。スクリプト付き。

このソフトの最大の特徴は、コマ送り（スタイルの連続）ではなく、動画である点である。また、以下の通り、音声と変速再生を除いて、DVD とほぼ同じ機能が実現できる。音声は目標言語（この場合は英語）が入っていれば目標言語の学習に問題はないし、チャプター・サーチ機能は備わっているので変速再生ができないことも語学学習には大きな障害とはならないだろう。

	音 声	字 幕	リピート再生	サーチ機能	変速再生	一時停止
DVD	複数可	複数可	二点間リピートなど	チャプターによる	8種類程度	可（スタイル並み）
バーチャルシアター	原語のみ	英語・日本語・なしの三種類	二点間リピートのみ	チャプター（シーン）による	なし	可（スタイル並み）

さらに、バーチャルシアターには、DVD ビデオでは今のところ実現できない以下の二つの機能が付いている。

▽スクリプト [シナリオ]（原語 [英語] あるいは日本語）が、実際に話されている箇所の前後とともに画面の下に表示できる。

*スクリプトは、対訳解説書に印刷されている。

▽辞書機能（単語を即座に調べることができる）。

◇『映画で英会話』シリーズ（朝日出版社、各2,500円）、1999年発売開始。

スクリプト付き。

このシリーズは、1999年8月に発売され、2000年1月現在、『終着駅』（ビットリオ・デ・シーカ監督、1953年）と『武器よさらば』（フランク・ボーゼイジ監督、1932年）の二冊が刊行されている。このシリーズは、すぐ上で述べたバーチャルシアター・シリーズの機能に加えて、以下の二機能が加わっており、また動作も安定している。

▽英語と同時に日本語のスクリプトが表示できる機能

▽自動添削ディクテーション機能（台詞の聞き取り、問題のレベルも設定できる）

それ以上の最大の長所は、以下の二点である。

▽映画がすべて収録されている

▽比較的低価格

したがって、このシリーズが以上の3つのなかで最も秀れていると結論づけられるだろう。

以上のように、コンピュータを用いた映像つき CD-ROM 英語学習ソフトの英語学習機能は、DVD に勝るほどであると言えるだろう。さらに、バーチャル・シアターシリーズと『映画で英会話』シリーズでは映画を二枚の CD-ROM に収録してあるが、CD-ROM が DVD-ROM (DVD ビデオではない) になれば、これが一枚に収録できるであろう。ただ、DVD ビデオが映像つき CD-ROM (あるいは、将来的には DVD-ROM) 英語学習ソフトに勝っている点は、ソフトの豊富さである。これは大きな違いである。著作権や製作の手間などの問題があるので、映像つき CD-ROM 英語学習ソフトがソフトの豊富さにおいて DVD ビデオに勝ることは今後に至ってもないであろうからである。

II. 映画教育における DVD ビデオの有効性

映画研究が世界で最も盛んなアメリカに比べるとまだまだだが、日本大学、早稲田大学、東京大学、京都大学、成城大学、明治学院大学などで映画を教える授業が開設されたり講座や学科や専攻などが設置され、日本にも映画研究が少しずつ定着しつつあると言えるだろう。この映画教育／研究に VTR の登場が大きな進歩をもたらしたことは、想像に難くない。なぜなら、映画館でしか観ることができなかった映画が家庭で手軽に繰り返し繰り返し観ることができるようになったのだから (四方田 [22-23] も、やや否定的にはあるが、そのことを指摘している)。その VTR に (そして LD にも) ほとんどすべての点において勝るのが DVD ビデオである。この DVD ビデオの映画教育／研究における有効性を論じてみよう。

◇音声と字幕

音声に関して DVD はオリジナル以外に7音声記録可能であるが、映画研究には原語が入っていれば大きな支障はないだろう。これに対して、字幕は、日本語だけではなく原語が入っていることは、大いに有効である。なぜなら、絶版や未発行などの理由でスクリプトが入手できない (あるいは入手困難な) 映画がかなりの数にのぼるからである。また、日本語字幕には当然ながら大きな省略があったり正確に伝えていないこともある (例えば、上で述べた CD-ROM 教材『映画で英会話』シリーズは、DVD ソフトの日本語字幕よりも正確な日本語字幕をほどこしてあるので、大変役に立つ) が、原語字幕は、ほぼ俳優が話した通りであり、正確に台詞を知ることができる。

◇一時停止

VTR 上の一時的停止は、画像が少し歪んでしまう。これに対して、LD (初期に発売された機種は必ずしもそうではない) と DVD は、あらゆるスタイルを再現でき、その上、スタイル写真と変わらないような高画質の画像が再現できる。これによって、映像の細部まで研究

できるので、例えば、演技研究に役立つであろう。あるいは、フォーカスに関して、スティール写真を用いることなく、オーソン・ウェルズ監督の『市民ケーン』(DVDはアイ・ヴィー・シーが発売)のディープ・フォーカスとその他の映画(例えば、モノコ [79] はスタンリー・キューブリックの『突撃』[1957]を挙げている)のシャロウ・フォーカスとを比較することができたりもする。この一時停止機能は、フレームの検討など、その他さまざまな利用ができるだろう。

◇諸再生機能

DVDの再生機能は、映画の構成単位に関する説明に役立つであろう。映画の最小構成単位はショット(日本ではカットとも呼ばれる)であり、映画はふつう500ないし1000(モノコ 109)のショットによって構成されている。このショットを切ったりつないだりすることを編集(モンターージュ)という。ショットの配列をデクパーージュと呼ぶ。ショットの意味のあるまとまりがシーンであり、さらに複数のシーンがシーケンスを構成する。ショットは、比較的確定しやすいが、シーンとシーケンスの確定は容易ではない場合が多い。ほとんどの映画DVDソフトは、チャプター分けがなされているが、このチャプターは、映画の専門用語で言えば、シーンあるいはシーケンスにあたる(例えば、『市民ケーン』の場合、118分の本編は、少なすぎる気がするが、12のチャプターに分けられている)。チャプター以上に小さな区切りはない。したがって、DVDソフトは、映画の最小構成単位であるショットにしたがって分けられているわけではない。そのようなソフトが実際に発売されるかどうかは別にして、ショットの数だけ信号を入れてショットごとに区切ることも理論的には可能であろう。前述したDVDレコーダー(パイオニアDVR-1000)では、ディスクナビ表示(DVDプレーヤーにおけるDVD MENUのチャプター表示=チャプター一覧のようなもの)付きだと99まで、その表示なしだと999まで分けられる。したがって、ほとんどの映画(ショット数が999以内の映画)をショットごとに区切ることができ、映画教育/研究に便利この上ない。

ただ、いずれにせよ、二点間リピート機能を用いて、あるショットを何回も繰り返して観ることは、現在のDVDビデオとそのソフトでもたやすくできる。例えば、『打ち上げ花火、下から見るか?横から見るか?』のラスト近くの見事なクロス・カッティング(二つかそれ以上のアクション[この映画の場合は、花火を見に行く途上のグループとプールの二人の二種類のアクション]のショットを交互につなぐこと;ちなみに、この映画のDVDソフトではチャプター18に収録されている)を繰り返して観る、といったことが容易にできる。

物語学的分析は1970年代に映画研究に大きな影響を与えた(Stam 69)が、このチャプター分けは、また、物語内容(story)の順序(order)の問題と深い関わりがある。映画用語でショット、シーン、シーケンスと呼ばれるものをどのように並べるかが順序であると言えるだろう。順序をデクパーージュと言ってもいいだろう。DVDビデオのプログラム再生機能(チャプターを並び替えて再生する機能)では構成要素を並び替えて再生することが可能である。したがって、統辞法が複雑な(時間が行き来する)映画(例えば、アンゲロプロス監督の映画やアラン・レネ監督の映画)を並べ替えて(すなわち順序を変えて)再生することも可能である。だが、DVDソフトで分割されている最小構成要素は、チャプター(すな

わち、ショットでなくて、シーンあるいはシーケンス)なので、並べ替えには限界がある。しかし、これも、前述のDVDレコーダーを用いれば実現できる。また、このレコーダーだと、ある映画のショットを並べ替えて編集するというのも容易である。映画教育／研究にとっては夢のような機能である。ただし、もちろん著作権保護などに十分な配慮が必要である。

さて、光ディスクであるLD・DVDの優れた点ばかり取り上げてきたが、VTRにも優れた機能を持つものがある。それは、語学教育に関して取り上げたサンヨーの時短プレイ機能である。音がほんの少しだが飛ぶので字幕付きの映画で用いた方がよいが、映画を時間短縮して観ることができる。もちろん、映画は通常の再生スピードで観るべきであるが、90分の大学の授業一コマ中に映画を観終わるには欠かせない機能である。時短再生は2倍速なので、90分の授業時間で180分の映画が観られるわけである。

◇サーチ機能と変速再生

サーチ機能は、語学教育に関する箇所でも述べたが、目的の箇所へ迅速にアクセスするのに至極便利である。実際の授業では、サーチを迅速に行なえないと授業進行の大きな妨げとなるので、この機能は貴重である。また、変速再生機能も、あるショットやシーンを速度を変えて(例えばスローで)再生してみるといった実験にも利用できるが、もちろんアクセスにも有効である。

◇マルチアングル機能／マルチストーリー機能

マルチアングル機能とは、同じ画面を複数のアングル(視点と言ってもいいだろう)から撮影した映像を提示する機能である。もちろん、ソフトに複数のアングルから撮影した画像が記録されていなければならない。このような複数アングルの画像が記録されているソフトには、今のところ、コンサートのDVDソフトが多い。管見に入った限りでは、映画のソフトでは複数アングルの画像を記録したものはない。だが、劇場公開版では使わなかったテイクをアングル機能で表示するといったこともアングル機能によって理論上は可能である。

マルチストーリー機能とは、マルチアングル機能を物語に応用したものだと考えて良いだろう。同一時間に複数の場面が進行したり、複数のストーリー展開が同時に収録されていて自由に選べる機能のことである。本格的なものはないが、ヒッチコックのリメイク映画『ダイヤルM』(アンドリュー・デイヴィス監督、1998年、DVDソフトはワーナー・ホーム・ビデオから発売)の場合は、「もうひとつのエンディング」が(マルチストーリー機能を使ってではなくて)特典映像として収録されている。さらに徹底的なものは、ヒッチコックの『見知らぬ乗客』のDVD(ワーナー・ホーム・ビデオ、3,400円)である。このDVDでは、DVDの両面に「ハリウッド・オリジナル版」と「イギリス版」の2バージョンを完全収録している。ハリウッドでは、一つの映画にいくつものエンディングを撮っておき、スタッフ試写などによって決めることが多いようだが、この『見知らぬ乗客』のDVDには、プロダクション・ノートも収録されていて、それによると、「ハリウッド・オリジナル版」と「イギリス版」のディテールとエンディングの微妙な違いは、両国の宗教観・倫理観の違いによるようである(日野117)。昨年日本で公開されたハリウッド映画『フランダーズの犬』は、

日本版ではネルロとパドラッシュが死を迎えるという原作通りのエンディングであるが、海外版ではハッピー・エンドとなっている。いずれにせよ、DVDソフトにこのような異なるバージョンのストーリーが収録されることは、映画とマーケット（市場）との関係といった問題を考える上でも有益である。

◇メイキングなどの付録映像

VTRソフトでもメイキングが別に発売されることはあったが、DVD（とりわけ製作年が新しい映画のソフト）では一つのソフトに収められていることが多い。これも、DVDの記録容量が大きいために実現したものである。映画のDVDソフトには、本編以外の付録映像が収録されている場合が多い。メイキング、キャスト・スタッフ一覧、などが収録されている。ここで、『がんばっていきまっしょい』（磯村一路監督、1998年）、『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』（岩井俊二監督、1993年）、『トレインスポッティング』（ダニー・ボイル監督、1996年）、『市民ケーン』（オーソン・ウェルズ監督、1941年）を例として示してみよう。

▽『がんばっていきまっしょい』（ポニー・キャニオン発売、4,700円）

このDVDソフトには、「キャスト・スタッフ」、「動画ボーナス」の他に、「静止画ボーナス」まで入っている。「動画ボーナス」には、「監督インタビュー」、「予告編」（劇場での予告編）、「主題歌」、「メイキング」が収録されている。「監督インタビュー」は、製作の過程やキャストや編集の際のポイントなどが語られていて、映画理解の助けとなる。もちろん、「メイキング」は、映画製作の現場を収録したものである。リハーサル、メイキャップ、セット、クランクインからクランクアップに至るまでの映像が収録されていて、実際にはなかなか見ることができない映画製作の現場を見ることができる。例えば、このメイキングに収録されたクランクインの映像では、チャプター4（ちなみに、このソフトは、本編120分の映画を40チャプターに分けている）の1ショットのドリー撮影が収録されている。主人公悦ネエが（ボート部を作ることを体育の先生に頼もうとして）階段をおりて体育教員室の前まで移動するショットである。このメイキング画像は、映画におけるショットの意味、ならびにその実際の撮影をよく教えてくれる。詳細に観ると、このメイキング画像のショットは、映画に使われているショットと微妙に異なっているので、同じショットの別テイクと分かる。いずれにせよ、このソフトの付録映像は、脚本などが収録されている『伊予東高校女子ボート部漕艇日誌 映画「がんばっていきまっしょい」フォトブック』（ワニブックス；ちなみにこの本の大部分はこの映画の公式ホームページで公開されている）とともに、映画理解の大いなる助けとなる。

▽『トレインスポッティング』（パイオニアLDC発売、4,700円）

このDVDソフトには、「キャスト・メニュー」、「スタッフ・メニュー」、「特典映像メニュー」が収録されている。「特典映像メニュー」には、「劇場予告編」、「劇場ティーザー」、「メイキング」、「未公開シーン」が収録されている。「メイキング」には、原作者、監督、プロデューサー、脚本家などのインタビューが収められており、原作をどのように映画にした

か（原作のエピソード並列形式を起承転結形式に変えたこと、リアリズムを超えてシュールリアリズムを取り入れたこと）などが説明されている。「未公開シーン」には、カットされたシーンが監督の解説とともに収録されており、映画編集一般や監督の編集意図が良く分かる。

▽『打ち上げ花火，下から見るか？横から見るか？』（ノーマンズ・ノーズ発売，3,800円）

この映画には、『少年たちは花火を横から見たかった』（ロックウェル・アイズ発売，ノーマンズ・ノーズ販売，3,800円）という，映画で主役をつとめた奥菜恵と山崎裕太が6年後に撮影地を訪ねるというソフトが発売されており，これがソフトの付録メイキング映像と同じ役割を果たしている。もちろん，DVDの容量から考えて，この二つのソフトを一枚のDVDソフトに収録することは可能であるが，この映画（ビデオでなくフィルムで撮影されているが，最初はTVで放映された）のカルト的人気のために，このような形になったのだろう。この『少年たちは花火を横から見たかった』に、『打ち上げ花火，下から見るか？横から見るか？』のメイキングと（監督，キャスト，プロデューサーなどへの）インタビューが収録されている。例えば，このメイキングには，花火論争のシーン（映画のDVDソフトではCHAPTER 6に収録されている）の各少年の見た目のショット（POV）をすべて同時に画面を分割して入れるという遊びが収録されている（実際の映画のこのシーンのカメラの動きは見事で，論争の臨場感を伝えている）。また，このメイキング・ソフトを観ると，物理的な事情（ふさわしいセットがない，など）のための現場での台詞やセットなどの重要な変更が良く分かる。

▽『市民ケーン』（ビームエンタテインメント発売，3,500円）

言わずと知れた映画史上の名作中の名作である。さすがに，この1941年製作の映画にはメイキングは付いていないが，「スタッフ・キャスト」，「イントロダクション」，「ケーンとは何者か？」，「オーソン・ウェルズの見た『市民ケーン』」，「撮影技術」，「映画史上のベスト・ワン」が付録されており，この映画史上の名作の意味を十分解説している。例えば，「撮影技術」では，映画史上有名なディープ・フォーカスをスティルを使って解説している。また，「オーソン・ウェルズの見た『市民ケーン』」では，リーランドとケーンの確執をウェルズへのインタビューならびに映像をまじえて解説している。DVDの記録容量ならびに機能を活かしたソフトである。

おわりに

語学教育ならびに映画教育におけるDVDビデオの有効性を論じてきた。DVDビデオを再生できるコンピュータも徐々に発売され（ただし，現在のところ，DVDビデオ専用プレーヤーによる再生に比べて，コンピュータ再生が勝っているということはない），また，DVDビデオソフトも再生できる「プレイステーション2」が2000年3月に発売され，ますますDVDの利用は広がっている。さて，最後に，このDVDビデオを実際に教室で使う際の問題点の一つである提示法について述べておこう。

現在，映像を学習者に提示する方法には，二通りある。一つは，モニター（一台，数台，

あるいは生徒卓付属)によって提示する方法であり、もう一つは、プロジェクターによって教室前面の大型スクリーンに映写する方法である。前者だとモニターの数あるいは大きさによっては見にくい場合があるのが難点であろう。また、後者の大きな難点は、教室を暗くしないと映像が見づらい点である。教室を暗くすると学生がノートを同時に取るのが困難になる。もちろん、DVD ビデオは、VTR などの他の映像・音声提示装置と同じく、この二通りの提示法のどちらにも使用できる。

実は、複数の学習者に一斉に提示できる(授業で言えば、一斉授業に用いることができる)という点が、DVD ビデオなどの映像・音声再生装置の特徴である。他のマルチメディア機器の代表であるコンピュータを用いた語学学習が一斉授業には適さないのに対して、映像・音声再生装置の場合は一斉授業に用いるのが容易である。これは、コンピュータがやはりパーソナル・コンピュータの名前通りに元々パーソナル(個人的)なものであるのに対して、DVD ソフトの主である映画が元々多くの人への同時公開(提示)を意図して製作されていることも原因の一つだろう。もちろん、DVD ビデオは、一斉授業ばかりでなく、個別学習にも用いることができる(ただし、著作権の保護には細心の注意を払う必要がある。著作権に関しては、『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック』を参照のこと)。いわば、DVD ビデオのソフトは、多くの人に同時に提示できるという点において、マルチメディア教材のなかで稀有な存在と言えよう。この一斉授業に用いやすいという利点の他に、詳しくはふれなかったが、低コストで導入でき、また操作も VTR と同じ位に容易だという利点も DVD にはある。

ところで、井上(152-158)は、学習の二重符号化説(dual coding theory)を紹介している。これによれば、人間は情報を処理するときに「言語システム」と「イメージ・システム」という二つの独立した認知システムを用いて処理しており、したがって、学習の際もこの両システムを機能させると情報をより強固に記憶に残すという効果があるのである。DVD ビデオをはじめとする映像・音声提示装置(上述したが、映像と音声以外にも文字を提示することができる映像・音声提示装置、特に DVD ビデオは、マルチメディア機器でもある)を用いた教材は、文字と音声のみを提示するだけの通常の教材と異なり、この両システムを働かせる学習に寄与していることになる。この DVD ビデオの機能の教育への具体的な応用法に関しては分かっていただけだと思う。詳論は避けるが、マルチメディア機器を用いた教育は、もちろん必ずしも万能であるとは言いきれない。だが、いずれにせよ、多機能を持ち、一斉授業にも個別学習にも用いることができ、低コストで導入でき、操作も容易であり、二つの認知システムを機能させる DVD ビデオを教育に大いに有効利用していく必要があることは否定できないだろう。

引用文献

- 赤堀侃司編『ケースブック 大学授業の技法』有斐閣、1997年。
 池田裕計「映画英語教育と CINEX」、スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版、1995年)所収。
 伊藤秀子・大塚雄作編『ガイドブック 大学授業の改善』有斐閣、1999年。
 井上智義編『視聴覚メディアと教育方法—認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために』北

- 大路書房, 1999年。
- エスクァイアマガジンジャパン編『DVDバイブル』エスクァイアマガジンジャパン, 1999年。
- 小笠原誠「今すぐはじめたい! パソコンで英会話」, 『週刊アスキー』1999年3月31日号所収。
- 金谷憲・谷口幸夫編『英語教師の四十八手3 AV機器の利用』研究社, 1993年。
- 『現代英語教育』編集部「資料 大学生の英語学習に関する意識調査」, 『現代英語教育』1999年1月号所収。
- 小西敏之「映画英語教育とレーザーディスク」, スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版, 1995年)所収。
- JACET 教育問題研究会編『英語科教育の基礎と実践—新しい時代の英語教員をめざして』三修社, 1998年。
- 鈴木博「視聴覚機器—テープ・CD・ビデオ教材, ラジオ・テレビ番組などの利用法」, 『大学生の英語学習ハンドブック』(研究社, 1999年)所収。
- スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 1995年。
- 関谷早苗「映画英語教育とCC (Closed Caption)」, スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版, 1995年)所収。
- 瀧口優「映画・ビデオの利用」, 『英語教育』1999年10月増刊号所収。
- 映画英語教育学会著作権問題専門委員会編『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック』映画英語教育学会, 1998年。
- 半田正夫「マルチメディアと著作権」, 高島秀之編『マルチメディア教育』(有斐閣, 1995年)所収。
- 野田一郎「視聴覚機器とメディアの利用法」, 大学セミナーハウス編『大学力を創る: FDハンドブック』(東信堂, 1999年, 初版は1992年そして増補改訂版は1993年に大学セミナーハウスより)所収。
- 長谷川裕行『DVD 導入大作戦』毎日コミュニケーションズ, 1999年。
- 原田益水『デジタル映像技術のすべて』電波新聞社, 1998年。
- 日野康一「『ダイヤルM』DVD—もうひとつのエンディング」, 『キネマ旬報』1999年7月下旬号所収。
- 藤本健「CD-ROM を利用した英語習得術」, 『ASAHI パソコン』1998年6月1日号所収。
- 文部省『外国語教育のための施設・環境づくり』ぎょうせい, 1994年。
- 柳善和「CD-ROM 教材『英語の魂①』『英語上達 スタートレック』」, 『英語教育』1999年6月号所収。
- 山田均「映画英語教育とシナリオ出版」, スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版, 1995年)所収。
- 吉田豊「映画英語教育とビデオ会社」, スクリーンプレイ編集部編『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版, 1995年)所収。
- 四方田犬彦『日本映画のラディカルな意志』岩波書店, 1999年。
- ルービン, ジョーン, アイリーン・トンプソン『外国語の効果的な学び方』大修館書店, 1998年。
- 『英語をモノにするためのカタログ '99』アルク, 1999年。
- 『視聴覚機器ガイドブック '99版』日本視聴覚教具連合会, 1998年。
- Stam, Robert, Robert Burgoyne and Sandy Flitterman-Lewis. *New Vocabularies in Film Semiotics: Structuralism, Post-Structuralism and Beyond*. London and New York: Routledge, 1992.